慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「江戸っ子」の人間像とその実体
Sub Title	"Edokko (江戸っ子)" : its human image and concrete substance
Author	田中, 克佳(Tanaka, Katsuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2003
Jtitle	哲學 No.109 (2003. 3) ,p.135- 147
JaLC DOI	
Abstract	"Edokko (江戸っ子)" is the unique human image which a newly-established city Edo produced in Tokugawa Japan. Then what is the human image? And what are the social background which produced that image and the concrete substance corresponding to the image? These are questions which should be grappled in advance to research the education in the city Edo in Tokugawa Japan.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000109-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

「江戸っ子」の人間像とその実体

田　中　克　佳*

"Edokko（江戸っ子）"
——its human image and concrete substance

Katsuyoshi Tanaka

"Edokko（江戸っ子）" is the unique human image which a newly-established city Edo produced in Tokugawa Japan.

Then what is the human image? And what are the social background which produced that image and the concrete substance corresponding to the image?

These are questions which should be grappled in advance to research the education in the city Edo in Tokugawa Japan.

はじめに

都市江戸は，近世日本を代表する都市である．参勤交代制度は，近世日本のすべての道をこの都市に通じさせた．政治・経済・文化のあらゆる方面にわたって江戸は日本の中心の位置を占めるようになる．その成立の初期，ひたひたと波打ち寄せた芦原も，やがて，政治的意図に支えられた日本一の武家の町として発展していったのである．こうしてこの都市の生成と深く関わって独特の気風・文化を持った都市住民が成立したことはよく知られている．この住民は「江戸っ子」と呼ばれ，古い伝統を有する公家の町京都の町衆やもう一つの類型を形成した商業の中心地大阪の町人と並

* 慶應義塾大学教授（教育史）

ぶ近世日本の庶民を代表する一つの類型を形成した.

本稿は，この近世政治都市江戸を代表する住民である，いわゆる「江戸っ子」の人間像とその実体を探ることを課題とする.

一　三田村鳶魚の「江戸っ子」

「江戸っ子」研究の最も有力な代表者のひとり三田村鳶魚(えんぎょ)は，「江戸ッ子」(『三田村鳶魚全集　第七巻』昭和50年，中央公論社，pp. 9–218所収. 本書は，昭和8年早稲田大学出版部から上梓された鳶魚「江戸叢書」の第一冊目だという.「編集後記」による.）の中で，エドッコは「江戸子」では駄目で「江戸ッ子」でなければいけない.「江戸を背負って生まれた若い者，という意味にならないから」(『三田村鳶魚全集　第七巻』p. 144）だといっている.

三田村のいう「江戸ッ子」は，表通りの住人ではない. 裏通りにある「裏店」(「建てつらねた家」という建て方からきた名称の「長屋」とはちがって，これは裏通りにあるという位置からきた名称だという）の住人で，これは，木戸があって両側にずーっと建っている. ここは商売のできない場所である[1].

したがってその住人は，「日庸取・土方・左官などの手間取・棒手振」といった人たちであり，棟梁とか鳶の頭とかは，小商人のいる横町とか新道に住んでいる.「この新道や横町に住んでいる手合いが，江戸ッ子の音頭を取るので，裏店の江戸ッ子の頭分に当たるのです.」(三田村，同前書，p. 150)[2]

それではこの種の手合を対象化して，これに「江戸ッ子」というレッテルを貼るようになったのはいつ頃からのことであろうか. この言葉の初出や使用の文脈・意味の詮索が，研究者の間で江戸ッ子とは何者であるかを

規定する決め手として利用されているわけであるが，それはどのような具合であったろうか．

三田村の指摘する江戸ッ子という言葉の初出は，寛政9年(1797)刊の洒落本『廓通遊子』である（三田村，同前書，p. 150）[3]．

また文化(1804～1817)以来「おらァ江戸ッ子だ」と自称するものが多くなってきたとも指摘する．例えば随筆『飛鳥川』（柴村盛方著．文化七年序）その他に見られるが，「いずれにも何の代表者でもない江戸ッ子が，ひとり力味で威張っているけれども，誰も相手にするものはない．いさみとか，きおいとかいう風な様子をして，今にも喧嘩でもしそうな様体に見える．」（三田村，同前書，p. 151）

一体「どうしてそんなばかな調子が出るようになったか」（同前，p. 151）を説明して鳶魚は，以下のように述べている．

時代は武家も町人も権力が固定し，資本が固定し，また算盤づくの時代になって，「世禄世襲である君臣の関係，一生奉公という主従関係が衰え」「一時雇いが多くなった．」(p. 151) これによって元文(1736～1740)頃から，一定の主人を持たず，「江戸中の白壁は皆旦那だ」（同前，p. 151）という手合いが多くなってきた．

また町火消という各町抱えの火消し人足が出来て各町内入用の最も大きな部分を占めるようになるが，これは一定の主人を持たない人びとである．ただ鳶の頭とか纏とか梯子といった役付の連中は，大工や左官も同様であるが，それぞれ出入先があって，普段には出入先の用事もつとめる．町内の棟上げから泥溝の掃除までする．そのうち「派手な旦那の贔屓を受けて，余計に金の貰えるようなやつが男を売り出して，講釈の種になるようなことをする．（略）それから江戸の市街が次第に開けてまいりまして，裏店が殖えた結果，棒手振が商売になるようになってきた．塩とか，菜とか，大根とか，八百屋ではない，一品売りの商売です．こういう連中が江

戸ッ子として，最も得意で威張っておった.」(同前，p. 152)

さらに次のような要素もあった．文政(1818～1829)の貨幣改鋳は，いつの時代のそれとも同じ様に，通貨は悪くなるが通貨膨張ということで一時の景気が立つ．出稼人を出せない諸藩制度の事情から来る人不足に加えて，この好景気に恵まれて，「江戸ッ子連中が頭を持ち上げることになったので，夜さえ明ければ金が取れる，金は身体にある，というような考えが起こってきた.」(同前，p. 153)

頻繁に発生した「江戸名物の火事」もその要素の一つである．火事で失うものの何もないいわゆる江戸ッ子には，彼らの労銀を押し上げる「火事は江戸の花」であったにちがいない．「だから明日の心配もいらなかったし，宵越しの銭はもたないという気持ちにもなれたのです」(同前，p. 153).

こうして「浅慮で，向こう見ずで，喧嘩ッ早い」がどこからも行動を束縛されることの少ない江戸ッ子というものが生まれて，後世から「感心」の心持ちで見られるようにもなるわけだが，この種の江戸ッ子像を虚構したのは芝居であり，「金のしゃっちょこを横目で睨んで，水道の水を産湯に浴び，おがみづきの米を食って，日本橋の真中で育った金箔付の江戸ッ子だ」(同前，p. 154) といった気の利いた言葉は皆狂言作者の創作で，実際の江戸ッ子にいえるような台詞ではない，という．

一方，『膝栗毛』『浮世床』『浮世風呂』『花暦八笑人』『七偏人』のような滑稽本などの小説は，江戸ッ子の悪口をさんざんに書いているが，これは，上記したような江戸ッ子の手合は本を読むことがないから遠慮なく書けたからだともいっている．

「小説でも読む人たちは，多少銭のある人たちですから，自分と世界の違った連中が，とんでもないことをするのを面白がって見る．今日江戸ッ子を面白がるのも同じこと (略) 江戸ッ子に対して感心するのも，面白が

るのも，皆この小説の読者の階級の人」（三田村，同前書，pp. 154-5）と蔦魚は書いている．

それでは，蔦魚が江戸ッ子に想定する手合の江戸に占める数，いわば江戸ッ子の人口学は，どのような具合であったろうか．

江戸ッ子は三代かかるといわれる．父母が江戸生まれで，他国生まれを交えず三代続かなければならないわけだが，この条件を満たすものは，武家にもあれば商家にもあったにちがいないが，この人たちは自分のことを江戸ッ子だとはいわない．これらを除いて，江戸人口の一割位がその該当数で，三割が雑種，六割が他国者と蔦魚は見ている．江戸人口は，町奉行支配の町家だけで人口五十万と見積もられているが，その一割で五万人．これに下記のような江戸と呼ばれる地域を加味して，蔦魚は，二万五千という数字を想定している．

江戸と呼ばれる地域は下町のことで城下町，つまり千代田城の前のところを意味し，新橋から筋違見附（すじかいみつけ）（大体今日の万世橋）までで，そのほかは江戸ではないという．芝に行けば芝ッ子，外神田なら外神田ッ子であり，浅草や本所・深川は江戸ではない．江戸前というのは，両国から永代までの間，お城の前面をいうが，文化・文政の江戸には本所・深川も入っているからこれを差し引いて上記のような数字の想定に相成ったというわけである．（同前，pp. 156-7）

芝居が持ち上げ，小説が面白がるこの二万五千ほどの江戸の住人の実像を，彼らの手間収入に見れば，一日三匁ないし五匁位で，雨降り・風間を引いて月25，6日の実働（江戸では一匁が百八文の固定相場）（同前，p. 157）．彼らの貧乏生活は，半纏・股引だけしか持たない彼らの衣生活がよく物語っていた．もし，彼らが長着（ながぎ）と呼ぶ普通の人の着る着物を持っているようなことがあっても，それは単物（ひとえもの）に三尺位のものであった．

さきにも触れたように江戸ッ子は江戸では誰も相手にする者がいないだけに，田舎者が来ると，ここだとばかりに気前を見せる．気前を見せるには銭がいるから，銭のかからない身のまわり，手拭の新しいの，足袋の新しいの，褌の新しいの，下駄の新しいのという風に気をつける．田舎者の古びたこれらを見つけては，悪口をたれ，威しつける．

ところが天保(1830～1843)の半ば頃になると銭の実入りがなくなって，江戸ッ子の勢いが以前ほどでなくなってくる．安政(1854～1859)頃までは，雨に逢うと脱ぎ捨てた足袋や草履を慶応(1865～1867)になると持ち帰るようになる．「年が明けたらどうしようとか，女房はどんなのを貰ったら所帯向きがよかろうということになって，啖呵も切れなくなった．」(同前，p. 158) そういう風で「だんだん本所・深川の方へ屏息してしまって，今度は江戸ッ子とはどんなものか，考えて見なけりゃならんようなことに立ち到りました．」(同前，p. 158)

以上見てきたように，鳶魚のエドッコは「江戸ッ子」でなければならない．それは，江戸と呼ばれる地域の裏店に住む日庸取の二万五千人ほどの「江戸を背負って生まれた」住人たちのことであった．

二　西山松之助の「江戸ッ子」

この鳶魚の江戸ッ子に対して，近年，「五十四種の文献から江戸ッ子に関する記事を採集し，かつそういう江戸ッ子が創出されてきた大都市江戸の背景社会を精細に分析」(西山松之助他編『江戸学事典』昭和59，弘文堂，p. 196所収「江戸ッ子」) して，新たな江戸ッ子像を提起しているのが西山松之助である．

この西山の「江戸ッ子」理解を西山の著書『江戸ッ子』(〈江戸選書〉1，吉川弘文館，昭和55年［注・本書は，昭和48・49年刊の『江戸町人の研究』第二巻・第三巻，吉川弘文館，所収の「江戸ッ子」「続江戸ッ

子」を主軸に，その後の新資料の追加，修正，再構成によってまとめられたものであることが，「あとがき」に記されている]）に則して再構成すれば，以下の通りである．

本書は，まず，以下の先行諸説，すなわち

①四代目広重（＝菊池貴一郎）：『江戸府内　絵本風俗往来』明38（菊池貴一郎著，鈴木棠三編『絵本江戸風俗往来』〈東洋文庫50〉平凡社）

②三田村鳶魚『江戸ッ子』昭8，早稲田大学出版部

③斉藤隆三『江戸のすがた』昭11，雄山閣

④西山松之助「後期江戸町人の文化生活」（『国民生活史研究五』昭37，吉川弘文館）

⑤浜田義一郎「江戸・東京人の気質・人情」（『国文学解釈と鑑賞』〈「江戸・東京風俗」特集〉昭38・1臨時増刊，至文堂）

⑥石茂田俊『江戸っ子』昭41，桃源社

⑦川崎房五郎『江戸八百八町』昭42，桃源社

⑧竹内　誠「寛政―化政期江戸における諸階層の動向」（『江戸町人の研究』第一巻，昭47，吉川弘文館

の吟味を踏まえて，

①「江戸ッ子の地域性」（四代目広重が規定した江戸ッ子は「将軍家と同一氏子」．「金の鯱（しゃち）をにらんで成人したという江戸ッ子の啖呵の重要要素」．これが江戸ッ子の条件となると「深川や浅草，山の手には江戸ッ子はいない」ということになるのか，といった問題．）

②「江戸ッ子の時代性」（三田村・竹内・川崎説では，江戸ッ子意識は，寛政以降，文化・文政期に成立したとするが，浜田・石茂田・西山説は，明和から天明頃成立した，とする[5]．）

③「社会構造と江戸ッ子の問題」（江戸ッ子という江戸町人は，近世封建社会の体制的転換期，つまり封建社会の崩壊過程に突入した時期に，大都市江戸の市民社会における内発的現象として創出され，顕在化した

ものであるが，その実体は何であり，その時期はいつかの問題.）

④「江戸ッ子気質の問題」（「宵越しの金はつかわないとか，見栄坊だとか，尻の穴が大きいとか，喧嘩っ早いとか，熱い湯に入るとか，侍をおそれないとか，こういう性格は果たして「江戸ッ子」気質なのかどうか．そうだとしたら，何故そうなったのか」西山松之助『江戸ッ子』前掲，p. 27）

といった問題が，「江戸ッ子の問題点」だと指摘し，このほかさらに，「いき」「通」と江戸っ子との関係の問題，浜田が指摘する武士市民（庶民化した武士）や「江戸ッ子」の成立ならびに成長発展と武士の関係の問題なども問題として指摘する．その上で，これらの諸説には，浜田説を除いて，「江戸ッ子」という言葉，「江戸ッ子」の実体を史料に即してはっきりと見定めるという点が欠落していると指摘して，「お江戸と呼ばれた大都市江戸に，江戸ッ子と呼ばれた人たちがどうして誕生したのか，その江戸ッ子の実体は何か．その成立した時期はいつか．ということを，江戸時代の文献その他の確かな資料によって論証」（同前，p. 8）することを課題として掲げている．

こうして「江戸ッ子」という言葉の出てくる江戸時代の文献「江戸ッ子文献一覧」((1)-(55)) を掲げ，この文献の吟味に立って，「江戸ッ子」に

①都市江戸の「根生いの町人」である「本格の江戸ッ子」（同前，p. 91）と②「自称江戸ッ子」（同前，p. 90）

の二種を区別している．

また諸説の描く「江戸ッ子像」（江戸ッ子気質）を以下のように整理・要約している．

「(一) 江戸城徳川将軍家のおひざもとに生まれ，(二) 宵越しの金をつかわない，(三) 乳母日傘で成人し，洗練された高級町人で，(四) しかも国初以来生え抜きの日本橋本町の生まれで，(五) 市川団十郎をひいきにする「いき」と「はり」とに男をみがく，生きのいい人間

というのが，数多くの文献が描いている「江戸ッ子」像である.」(同前，p. 94)

(なお注記しておけば，西山は，この気質は，上記二種の江戸ッ子像の前者の気質を示すもので，従来の多くの江戸ッ子論者が説いてきた「見栄坊」「向こう見ずの強がり」「喧嘩っ早い」「生き方が浅薄で軽々しい」「独りよがり」は，前者の半面・変形，としている．同前，p. 96)

こうして，この気質，つまりはいわゆる「江戸ッ子」像，の成立期と成立事情についての西山の見解は，以下のようである.

文久2年(1862)の参勤交代制の廃止まで，江戸には，入れ代わり立ち代わり出入する田舎まるだしの田舎侍の江戸駐留が見られ，大名の数だけの田舎が存続した．また，江戸店は，その多くが，男ばかりの店員の経営する，近江・伊勢・尾張などの地方本店からの出店であり，江戸には地方言葉や地方の生活慣行が存続した．つまり江戸には，「江戸開府以来百数十年を経った明和から天明ごろになっても，なお依然として，少しも江戸化しない地方色が，さまざまな状態で存在した.」(同前，p. 12) これに対して，江戸根生いの札差とか魚河岸とか酒問屋とか材木商，その他多くの職人たちは，その経済的実力が大きく成長するにつれて，生粋の江戸町人として目に付くようになり，明和・安永頃，早くも川柳（浜田義一郎による「江戸ッ子」初見の川柳「江戸ッ子のわらんじをはくらんがしさ」(明和8[1771]年――これが目下のところ「江戸ッ子」の初見ということになっている．さきの鳶魚の初見より，25年ほど早い.）に「江戸ッ子」気質のいくつかが姿を見せ始めるようになるが，この大都市江戸独特の町人気質を対象化して典型化した表現を与えたのは山東京伝（宝暦11[1761]～文化13[1816]）である.

宝暦以降の江戸の文化社会の風潮に元禄への懐古的風潮がある．それは，たとえば当時ようやく江戸の大町人として目立つようになった江戸独特の特殊町人札差の行状などに認められる．札差を主勢力とした当時の十

八大通は，元禄の紀文・奈良茂の当代版であり，今様大尽舞の実演者たちであった．「通人とか大通と呼ばれる江戸町人が，「いき」と「はり」を本領として吉原に男だてを競い，そういう心意気を団十郎が歌舞伎の舞台で荒事芸としてデフォルメした．これら莫大な江戸町人たちの行状は，全体としてこれを大観すれば，確かに一種の畸型化した大尽舞と見うるであろう．そういう江戸の町人が成長してきたことは，他の都市で見ることのできない特殊現象であった．この特殊現象は，大江戸に根を張り，大江戸に住みついてきた根生いの江戸町人たちの実力が，ようやく充実した結果の爆発現象なので，それが「江戸ッ子」の実体なのである．（略）そういう「江戸ッ子」を客体視し，冷たく見すえてこれを典型化したのが山東京伝であった．」（同前，pp. 100-101）と西山は書いている．

その成立時期は，天明7年(1787)（京伝作の洒落本『通言総籬（そうまがき）』[6] ―同8年（『仁田四郎［割角書き］冨士之人穴見物』）であり，寛政期以降の諸書の描く「江戸ッ子」は，この京伝の踏襲あるいは亜流にすぎない，としている．（同前，p. 98）

こうして要するに「「江戸ッ子」は実体としては宝暦以降形成されてきたのであるが，いわゆる「江戸ッ子」としての気質を備え，江戸独自の人間類型として成立したのは天明期のことであった．」（同前，p. 101）というのが西山の「江戸ッ子」成立期に対する考えである．

京伝の典型化した本格の「江戸ッ子」は，客体として，客観化した「江戸ッ子」であった．これに対して式亭三馬（洒落本『傾城買談客物語（けいせいかいだんきゃくものがたり）』寛政11[1799]―「江戸ッ子文献一覧」(20)）や松風亭如琴（洒落本『風俗通』寛政12―「江戸ッ子文献一覧」(21)）の作品の「江戸ッ子」は，一人称の，気負い立った，空威張りする自称「江戸ッ子」である．先述のように前者は，宝暦以降顕在化し，天明期に典型化された．後者は寛政の頃から現れて，化政期に一般化する．この間の事情を西山は，次のように

見る.

「天明成立の「江戸ッ子」は，札差商人たち，あるいは魚河岸の魚問屋たちが中核になっているような，江戸根生いの大商人ないしは中堅町人たちがその主体になっていたと考えられ，これらの町人は，侍を小馬鹿にし，吉原や芝居を牛耳って気を吐いた．そうして，黄表紙や洒落本文学の土壌になった.

ところが，寛政改革は，このような「江戸ッ子」を反体制人間として叩きつぶし，「江戸ッ子」作者京伝も刑罰に処され，洒落本そのものも大弾圧をうけ，このため「江戸ッ子」町人は壊滅に瀕するほどの大打撃をこうむった．しかし絶滅してしまったわけではなく，(略) 魚河岸の旦那衆たちは，立派に，この「江戸ッ子」の伝統を誇りとしていた.

そうして一方に，三田村説や竹内説がのべたような下層町人としての自称江戸ッ子が多数創出されるようになったのである．江戸の町人と一口にいっても，さまざまな階層が存在したように，「江戸ッ子」にも，このように，時代の推移にともなって，階層差による典型の相違が生じているのである.」(同前，pp. 104-105)

結　　び

以上見てきた西山説に依拠しながら「江戸ッ子」の人間像とその実体を整理して述べれば以下のようである.

江戸期全期をかけて江戸化が進行する一方，同時に多数の地方が存続した都市江戸に，その発足から百数十年経った宝暦期以降，江戸独自の特色を持った人間像の実体が目立ちはじめた事実を踏まえて，これを対象化して典型化した山東京伝の天明7年・8年の作品によって「江戸ッ子」気質(像) が完成する．それは要するに「将軍家のおひざもとに生まれ，宵越しの金をつかわない，乳母日傘で，日本橋本町の真中で成人し，「いき」と「はり」に男をみがく生きのいい人間」(西山『江戸学事典』前掲，p.

196）というもので，具体的には，「日本橋の魚河岸の大旦那たち，蔵前の札差，木場の材木商の旦那たち，霊岸島や新川界隈の酒問屋とか荷受商人というような，元禄以前ごろから江戸に住みついて，江戸で成長してきた大町人ならびに諸職人たち（略）こういう人たちが江戸ッ子の主流」（西山『江戸ッ子』前掲，p. 9）をなした．

「ところが十九世紀を迎え化政期以降幕末になってくると，江戸の下層町人までが広汎に文化活動をしたり，行動文化の潮流に乗って江戸近郊や時には遠い旅に出かけたりするようになり，そのような時に，自分が江戸生まれの江戸育ちの右にあげたような気質を完備した江戸ッ子だと自負して空威張りをするような江戸ッ子が出現してきた．」（『江戸学事典』前掲，p. 197）蔦魚の江戸ッ子は，この空威張りする江戸ッ子（西山はこれを「自称江戸ッ子」と呼んでいる）で，いわば本格の江戸ッ子の亜流である．

要するに「江戸ッ子」には，18 世紀後半期に成立する「生粋根生いの江戸町人」としての江戸ッ子と 19 世紀も化政期以降幕末期に登場するいわゆる「自称江戸ッ子」の二類型が区別されるのである．

本稿での「江戸っ子」表記は，この両類型の「江戸ッ子」を内包する概念の表記を意図して使用した．

注

(1) この裏店の店子に対する大家，つまり家主とは，その地面の所有者である地主の使用人で，地主に代わって町の役をつとめるから町役人でもあった．地面を持つにはそれだけの資力のある人でなければならないから，これは大半が商人であって，したがって町人といえば商人といった風情で，町の万端は地所持ちの仕事である．町内費用の相談などは，第一が地主寄合，その次が地面を借りて家作をした人たちの町内寄合という表店の人たちの負担であり，裏店の住人の負担はせいぜい釣瓶銭とか木戸口の鍵が壊れた際の鍵銭くらいであった．pp. 148–9）

(2) 蔦魚は，知識も資力も有力でない「江戸ッ子なるものが，八百八町の人の心持ちを代表するように考えられてきたのは，よほど不思議なことなのです．」（三

田村『江戸ッ子』前掲，p. 150）といっているが，これは，いわゆる江戸ッ子の心持ちが江戸八百八町を代表するという有力な考えのあることを認めた発言でもある.）

(3) 西山松之助『江戸ッ子』（前掲，p. 36）によると，蔦魚の昭和8年刊の早稲田大学出版部本[p. 319]では『廓通荘子』で寛政7年刊という．中央公論社版の『三田村蔦魚著作集　第7巻』では，寛政9年刊『廓通遊子』となっており，これは，岩波版『古典籍総合目録』1990では寛政九年刊となっている.）

(4) 蔦魚は「熊さん八さん（は，略）手習いをしたこともないし，名前も書けないという程度の人物」（三田村，前掲書，p. 148）としている．ただこの理解には，江戸時代の寺入り（入学）時の師匠への挨拶に「我子ハ権兵衛，八兵衛ガ読ミ得，又請取文ヲ認ムルヲ得バ足レリトハ，其頃ノ口癖タリシハ是レ殊ニ最下等ノ輩ノミニアラザリシト云フ」（『維新前東京市私立小学校教育法及維持取調書』p. 45）とある事実と重ね合わせると，蔦魚の理解の正当性には吟味の余地がある.

あるいは蔦魚のこの指摘から出発するならば，蔦魚の江戸ッ子は寺子屋にも通えない層の人びとということになりそうだが.

(5) 三田村の「江戸ッ子」蔑視の史観は，その後の江戸ッ子研究に最も有力な影響力を及ぼすことになったが，後述の「江戸ッ子文献一覧」などを踏まえて西山は，これを高級幕臣の村山摂津守［文献一覧(52)］から受け継いだものと考えている.（西山，前掲書，pp. 81-83）

(6) 同書の描く江戸ッ子気質は，次のようである.

「金の魚虎をにらんで，水道の水を産湯に浴て，御膝元に生まれ出ては，拜搗の米を喰て，乳母日傘にて長，金銀の細螺はじきに，陸奥山も卑とし，吉原本田の髣筆の間に，安房上総も近しとす．隅水の鮑も中落は喰ず，本町の角屋敷をなげて大門を打は，人の心の花にぞありける．江戸ッ子の根性骨，萬事に渡る日本ばしの眞中から，……」（『黄表紙・洒落本集』［日本古典文学大系　59］，岩波書店，p. 357）

〔付記〕本稿は平成12年度慶應義塾大学特別研究休暇の成果の一つであることを記して謝意を表する次第である.